台大日本語文研究第 13 期
2007 年 6 月，頁 97-126
本文 2007-0226 收稿，2007-0622 通過刊登

有關接尾詞「－garu」之考察
——以與形容詞之接續為中心

黃鴻信*

摘要

有關接尾詞「－garu」之用法，截至目前之各種研究，或謂表示緣於非語言行動之動作性，或謂藉以掌握人內部情感轉化為外部行動時一連串之過程，要之皆着眼於動的層面，惟論者間之見解並不盡一致。

本研究承續各先行研究之成果，以形容詞為中心，就有關接尾詞「－garu」及其相關方面加以考察。其主要結果如下：(1) 使用「－garu」時，「－garu」接續之語詞必須具有受到外界事象所觸發而於句中主語之內側層面引起該形容詞之語意內容之性質；(2)「－garu」係當形容詞所具有之內側—亦即深層—之感情・感覺露呈於外側—亦即表層—之層面時所使用。此即「－garu」之功能。其雖亦常付隨非語言行動，但非語言行動之功能僅止於輔助認知感情・感覺之表象化而已；(3) 使用「－garu」時，一般而言，形容詞所表示語意內容之程度會加深，超越 neutral 而進入 plus 的境域；(4) 感情・感覺自深層經表層、透過行動呈現、接著主語狀態之變化、以迄經由人為刺激而引起感情對象樣態之變化，此一連串動態之各個階段，依序為：形容詞、「－garu」動詞、「－mu」類動詞、「－ru・－maru」類動詞、「－meru」類動詞等，其定位相當明確；(5) 自前述之定位，亦可清楚掌握「－garu」動詞與「－mu」類動詞之差異。即，前者內含形容詞本

* 台灣大學日本語文學系副教授

來之語意，依然具有形容詞性質之功能，後者由於係透過行動具體呈現，故擔負動詞性質之功能。

關鍵詞：感情・感覺・內側層面・表象化・「－garu」動詞・「－mu」類動詞

A Study on the Suffix "-garu": Centering on the Conjuncture with Adjectives

HUANG, Hung-hsin*

Abstract

Concerning the suffix "-garu", some say it indicates the action of non-linguistic movement, some say it is used to control the changing process from internal emotions to external actions. As opinions vary, no unanimous conclusion can be drawn.

Centering on adjectives, this paper tries to inquire into the suffix "-garu" and the problems correlated with it. Our findings are as follows:

1. The words and phrases following "-garu" must have a property: when sparked by outside objects, they can draw forth the meanings of the adjectives in the deeper inside of the subject.
2. When we use "-garu", the deeper emotions and feelings of the adjectives usually come to the surface, and become visible and apparent.
3. When we use "-garu", the meanings of the adjectives will go deeper—beyond the state of "neutral", into the state of "plus".
4. Corresponding with the varying stages of our emotions and feelings are adjectives, verbs with "-garu", "-mu" verbs, "-ru • -maru" verbs, "-meru" verbs, and so on.
5. The differences between verbs with "-garu" and "--mu" verbs are very clear: the former still possess the nature and function of adjectives, the latter bear the function of verbs.

Key words: emotion • feeling, deeper inside, come to the surface, verbs with "-garu", "-mu" verbs

* Associate Professor of the Department Japanese Language and Literature, National Taiwan University

接尾辞「－がる」についての考察
—形容詞との接続を中心として

黄鴻信*

要旨

接尾辞「－がる」の使われ方について、従来の諸研究では、非言語行動による動作性を表すとか、人間の内的感情が外的行動へ転化する一連の流れを把握することであるとかいうように、主として動的側面に着目していたが、論者の間にその見解も必ずしも合致していない。

本研究はこれまでの先行研究の成果を踏まえて形容詞を代表として接尾辞「－がる」の機能をめぐって考察を行った。その結果として次のようなことが分かった。(イ)「－がる」の使用のために、「－がる」がつく形容詞には、外的事象に触発されて、文中の主語に当たる者の内的側面に、形容詞の意味する内容を引き起こさせる性質が含有されていなければならない。(ロ)「－がる」は形容詞の有する内的、つまり深層的な感情・感覚が外的、すなわち表層的側面に呈出されるのに用いられる。これが「－がる」の機能である。そこにはしばしば非言語行動が付随されているが、それは感情・感覚の表層化を認知するのに補助的な働きをするのに止まる。(ハ)「－がる」を用いるために、形容詞の意味する内容は、その度合が増幅され、ニュートラルの線を越えてプラスの域に入っているのが一般的である。(ニ) 感情・感覚が深層から表層を経て、行動による実現、そして主語の状態の変化、更に人為的刺激による感情対象の様態の変化に至っての一連の動きの各々の段階を表すのに、形容詞、「－が

* 台湾大学日本語学科準教授

る」動詞、「―む」類動詞、「―る・―まる」類動詞、「－める」類動詞が確固として位置づけられる。（ホ）前記の位置づけから、「－がる」動詞と「―む」類動詞との違いもはっきりと把握することができる。前者は形容詞の本来の語義を内包しており、依然として形容詞的働きを持つのに対し、後者は行動によって具現されるので、動詞的働きを果すのである。

キーワード：感情・感覚・内的側面・表層化・「－がる」動詞・
「―む」類動詞

接尾辞「―がる」についての考察
――形容詞との接続を中心として――

黄鴻信

１・はじめに

接尾辞「―がる」の使い方について、小山（1966）が「―がる」を属性形容詞と感情形容詞とを弁える表徴であるとして立てて以来、西尾（1972）、森田（1988）を経て、清水（1992）、黄（1999・2004）、大曽（2001）、王（2005）に至るまでの諸研究は、大方この線に沿って、感情形容詞[1]と「―がる」との結合に着目してなされてきた。しかし、「酸っぱがる」、「苦がる」はあるが、「甘がる」、「塩辛がる」はない。「後ろめたがる」は使われるが、「後ろ暗がる」は見当たらない。従って、一口に感情形容詞と言っても、すべての感情形容詞に「―がる」がつくとは限らない。どのような性質を有する感情形容詞ならば、「―がる」と接続することができるのか。言い換えれば、感情形容詞に「―がる」を接続させるためにどんな条件を要とするのか、この点については、詳しくは次節２.「先行研究」に委ねるが、経験者とその主観的判断が必要である[2]と言われたり、「語基が、「人間の動的側面を含意する」側面を有する」ものと接続しやすい[3]と言われたりする。前者は、例えば「母はこの鍋を重宝がって使っている。」[4]のように、事実主語に当たる「母」と「―がる」動詞との間の主述関係であり、「―がる」の接続する「重宝」の性質について説くものではない。後者の説については、例えば「芸術家がる」、「ありがたがる」のように、語基の「芸術家」、「ありがた」はそれぞれ

[1] 従来の用法では感情形容詞はいわゆる感情形容詞と感覚形容詞（ともに形容動詞を含む）を指す。後に触れるように、一部の属性形容詞にも感覚を表す機能を持っている。この慣用の感情形容詞に感覚を表す一部の属性形容詞を含めて言う場合は特に用語がないので、本稿では便宜のためにそれを「感情・感覚を表す形容詞」と呼ぶことにする。
[2] 清水（1992:12-14）
[3] 黄（2004:107）
[4] 清水（1992）から引用。

評価的名詞と感情主の性状を表す形容詞であり、その中に「動的側面」が含まれていない。従って、「人間の動的側面を含意する」という指摘は、「―がる」のつく語基の性質というより、「―がる」そのもの自身の機能を語っていると見受けられる。

一方、「―がる」の接続範囲は感情形容詞のみでなく、「行きたがる」、「通人がる」、「強がる」などのように、助動詞「たい」、そして一部ではあるが、名詞ないし属性形容詞につくこともある。更に、次の（１）、（２）に示すように、謝罪表現の「すまない」に接続する例もよく見られる。このように異なった性質の言葉に用いられうるということ自体は、「―がる」に一貫した機能があるということを物語っていると考えられる。この点については、従来の研究では、必ずしも一致した見解を示していない。例えば、西尾（1972：27）は「接尾語「～がる」は，人間が，形容詞の表わしている内的な気持ちや状態にあることを外的な態度・言動などに示すことを意味するもの」と指摘しているのに対し、黄（2004：115）は「人間の内的感情からそれによって触発された外的行動への一連のながれを把握することこそ、「―がる」の基本的な機能である」と述べている。内的な気持や状態を外的な態度、言動などに示すという点で、両者は一致しているが、内から外への一連の流れを把握するかどうかという点で異なっている。次の（３）における「嬉がっている」と、（４）における「惜しがっていた」は、ともにもとは感情形容詞であり、文脈からは内的感情を外的行動に示すという指摘に合致している。しかし、（５）の「カッコ良がって」と（６）の「暗がる」は、もとはともに属性形容詞であり、文脈からは結果として顕示されている事象を把握することができるが、内から外へという変化の過程は表現のポイントをなしていないと読み取れる。このような論者相互間または論説と事実との間の食い違いを引き起こしたのは、これまでの研究はあくまで感情形容詞が含有する“感情・感覚”と“形容詞”という成分にとらわれすぎており、専ら感情形容詞に「―がる」がつく側面に注目し、他の属性形容詞や名詞に「―がる」がつく側面

を疎かにしているということに一因を求めることができると思われる。

本稿では、上記の指摘を踏まえて、先行研究の結果を検討しながら、接尾辞「―がる」を従えうる語にどんな性質が含有されているか、そして「―がる」で表現するための条件は何かを探った上で、「―がる」の機能について究明したい。これと関連して、同一語基を有するいわゆる「－がる」動詞と「―む」類動詞との意味的相違に関して考察した上でその位置づけを解明したい。

先に触れたように、「―がる」は形容詞（形容動詞を含む）、助動詞「たい」、一部の名詞、そして「すまない」などにつく。そのうち、量的に最も多いのは形容詞である。一方、実際に検討してみた結果から言うと、名詞その他の場合は形容詞の場合と同様な傾向を見せているので、以下では便宜のために形容詞を代表として論を進めていくことを断っておく。

（１）陽子は、順子に真実を打ち明けなかったことを後悔してあやまった。そのとき順子はいった。「陽子さん、わたしがあなたの立場なら、やはり本当のことは言えなかったと思うわ。だから、わたしに***すまながる***ことはないのよ。それよりもわたしは父の罪をおわびしたいと願い続けてきたの。神さまにも人にも許していただきたかったの。こうしておわびできて、どんなに気が楽になったか知れないわ」（三浦『氷点　続』）

（２）母が、【略】翌朝、「足の付け根が痛い」と言って、ベッドから起き上がれなくなってしまいました。【略】ベッドの上で使える便器を買ってきて、下の世話はすべて私がしました。母が「悪いわねえ」としきりに***すまながる***ので、「娘にそんな遠慮しているようじゃ、施設に入って赤の他人様になんて、やってもらえないじゃない」と言いながら、（だから、私が最後まで面倒見るからね）と思っていると【略】。（読売新聞　05 年 8 月 22 日）

（３）すぐ立って奥の四畳半へ駆け込んだ彼が、其所から新しい玩具を茶の間へ持ち出した時、小林は行きがかり上、ぴかぴかする空気銃の嘆賞者とならなければ済まなかった。叔父も叔母も***嬉しがっている***わが子のために、一言の愛嬌を義務的に添える必要があった。（夏目『明暗　上』）

（４）「就職組ですか」啓造は就職させようとも考えてはいない。「沼田さんが***惜しがっていた***わ。社会科の時間でも、陽子はとても鋭い質問をするんだって。沼田さんはぜひ大学へやりたいっていっていたわ」（三浦『氷点』）

（５）これはボクの「カミさんと仲良くするのが倖せなリタイアメントの秘訣――できない人は離婚して仲良くできる人を見つける」という理論と合致する。***カッコ良がって***不倫して若さを誇示する人もいるが、あれは逆効果である。不倫ほどストレスがたまるものはない。（大橋『巨泉』）

（６）芭蕉が詠んだ「この道や　行く人なしに　秋の暮」という一句が気に入っている。【略】例えば、自転車の練習帰りに夕日を背に受けながら家路を急いでいたり、誰も散歩していない土手をランニングしていたり、部屋が***暗がる***のも気がつかず読書をしていたり。そんな秋の孤独感を感じる時にふと思い出すのが、前に挙げた一句なのだ。[5]

２・先行研究

まず、接尾辞「―がる」を従えうる語の性質について、森田（1988）、清水（1992）、黄（2004）を挙げて検討してみる。

森田（1988）は形容詞を感情・感覚形容詞と属性形容詞に二分して、それぞれに「―がる」の意味を分析する際の三つのポイント、すなわち表出・切実性・誇示を絡み合わせて、その語基になりやすい形容詞の特徴と、なりにくい形容詞の特徴を概括的に帰納した。これは、各カテゴリー別に見れば、当の形容詞の意味的特徴によっ

[5] http://homepage2.nifty.com/forest-g/diary/diary0310_a.html　2006/8/8

て「―がる」と結合しうるかいなかに関して見当もつく。しかし、ある形容詞に「―がる」がつくかどうかを弁別するのに曲折した手続きを取らなければならないし、弁別する際に迷ってしまう恐れもある。例を挙げると、「かっこいい」に「―がる」がつくかどうかについて、まず、それは感覚を表すものであることを確かめ、次に、表出・切実性・誇示のうちのどんな特性を持っているかを弁え、そして「その時、その場」の感覚を表す形容詞か、それとも「静的、持続的な感情」を表す形容詞かを判断する。この場合、ことさら「その時、その場」、言い換えれば一時的な感覚と、「持続的」な感覚とのどちらに当てはめるべきかについて迷ってしまいかねない。また、かりそめすべての条件が合っているとしても、果たして「―がる」をつけてよいかどうかも見分けがつかないかもしれない。例えば、「楽しい」は氏の説によると、「―がる」がつかない類にされているが、辞書[6]には接尾辞として「―がる」がつくと見られる一方、（７）に示すように実際用いられている。

（７）人を不愉快にして***楽しがる***阿呆はいっぱいいる。本当に、掃いて捨てるほどいる。[7]

清水（1992）では形容詞の語用論的観点から「―がる」を付加する条件として当該の形容詞の意味する主観内容を経験する者が存在しなければならないと述べている。この中に二つの問題点が含まれている。一つは経験者の存在であり、今一つは主観内容、つまり主語に当たる者の主観的判断である。そもそも形容詞は人間や物事の性状を指し示すものであるので、当の性状の主体、すなわち主語の存在が一般的である。これは、感情形容詞のみならず、属性形容詞の場合でも同断である。（８）～（10）に見るように、主語は顕在しているか、潜在しているかの違いこそあるが、文脈からはそれが存在していることが分かる。しかし、後の（16）や（42）に見るよう

[6] 『新明解国語辞典第五版』（三省堂　1997）「楽しい」の項を参照されたい。
[7] http://blog.livedoor.com/common_theme-88880.html　2006/8/9

に主語不在の場合もないわけではない。従って、経験者の存在は「―がる」との係わり合いにおいて「―がる」付加の必須条件というより、主述関係と位置付けられるものである。一方、経験者の主観的判断という点に関して、先述したように、形容詞は本来人間や物事の性状を表現するものであるので、それ自身には「主観」とか「判断」とかいう要素が含まれていない。ここから見れば、「主観的判断」というのも、「―がる」を従えうる語基の性質についてというより、「―がる」という接尾辞の性質について言うものであると思われる。

（８）「ほら、***陽子さんが迷惑がっている***じゃないか。どんな話か知らないが、君って失敬な人間だなあ」(三浦『氷点　続』)

（９）「あなたは、うらやましいほど、運勢がお強い」「***うらやましがっていないで***、自分のことも占ってごらんになればいいのに。【略】」（星『おのぞみ』）

（10）「議論する気はない。目先の成績だけで、右往左往すれば、しっかりしたお得意をなくしてしまうんだ」「時代が違うんじゃないかと思います」「***新しがっている***のか」[8]

黄（2004）では、語彙的意味の立場から、「「―がる」が接続するのは、語基が「人間の動的な側面を含意する」側面を有するからだと考えられる」と指摘している。前掲（３）では空気銃をもらった子供が喜んでいる模様や、（４）では「ぜひ大学へやりたい」という文脈から沼田が色々と工夫をしている有様を想像できるように、「嬉しがっている」や「惜しがっていた」などには動的な側面を含意していると思われる。しかし、氏は、「―がる」の概念構造を「感情所在」と「態度表出」に分け、(11) における「この女は嬉しがっているのか」について、「その感情を有するかどうかという事実に着目したもの」であり、「「感情所在」を意味する」が、(12) における「可愛がる」について「「お母さんがかわいい」あるいは「俺がかわいい」ではなく、大事に接するという「態度表出」」であると述べている。

[8] 清水（1992：14）から引用。

言い換えれば、感情所在というのは当の感情形容詞の意味する情態に身を置かれている、内的な段階に止まっているが、それを外的に発するのが態度表出であるということになる。このように見てみると、その動的な側面が表出すされているかどうかも文脈によって異なってくるし、「動的な側面を含意する」のは「―がる」が接続する語基ではなく、「―がる」という接尾辞に関わっていると考えるべきであろう。

（11）登美子は真剣そうな表情をしていながら、ともすれば微笑が顔の上にうかび上がって来る、それを強いて抑えているような様子だった。この女は***嬉しがっている***のか……と彼は思った。

（12）山岡：お母さんはどうしておられるだろう？俺はずいぶん数夫さんのお母さんのおさとさんに***可愛がって***もらったもんだよ。[9]

さて、「―がる」の機能について、清水（1992：17-18）では「経験者の感情・感覚・判断を引き起こさせる事態のあり方を、経験者が観察者に、そのような感情・感覚・判断の存在を認めうるような言語的・非言語的行動によって示す」と規定した上で、「言語的行動よりも非言語的行動の方が要請度が高い」と述べている。つまり、非言語行動による動作性を表すというのが「―がる」の機能であると言い換えることができる。前掲（３）の「嬉しがっているわが子」や（５）の「カッコ良がって」のように、文脈からは各々の感情主は言語行動によってその感情を示しているかどうかは分からないが、非言語行動の方をなにかと外側から観察できる。これは日常生活でよくある経験である。しかし、文脈に言語行動が示されていないから、それは現実にも現われていないとは言い切れまい。これに対し、（２）における「すまながる」や（９）における「うらやましがっていないで」は、それぞれその前の「わるいねえ」と「うらやまし

[9] （11）・（12）ともに黄（2004）から引用。

いほど」という言語行動が示されているからこそ、成り立っているのである。一方、殊に（９）は占いの場面であるから、その「うらやましいほど」には、非言語行動による動作性が顕示されているかどうかも考えられるものである。従って、非言語行動による動作性と云々するのにはなお論議の余地があると言わざるをえない。

黄（2004）では、先に述べたように、「人間の内的感情からそれによって触発された外的行動への一連の流れを把握することこそ、「―がる」の機能である」と述べている。「嬉しい」は内的感情であり、それが転化して外的行動として表現されるのは「嬉しがる」であるように、理論的には「嬉しい→嬉しがる」は確かに内から外へ表出される一連の流れと認められる。しかし、実際の表現では、(13)、(14) に示すように、内から外への一連の流れを把握するのではなく、内的な感情・感覚が外的な行動へ転化する過程は捨象され、その時点において既に現われた結果の方に着目するのであると見受けられる。このような用いられ方は、前掲の例のいずれもそうであるように、多々あるのである。つまり、黄（2004）は内から外への転化過程にとらわれすぎていると思われるのである。

(13) ゼフ星人たちも、宇宙船に戻ってから、***ふしぎがっていた***。
「どうもわからん。やつらは心から喜んでいた。あんな安価なくずみたいな品なのに。実用性だってまるでなさそうなのにな」（星『おのぞみ』）

(14) ３０℃～４０℃も***熱がる***と「脳にこないか？」「肺炎になるのでは？」と不安ですね。でも脳の病気でなければ“脳にくる”ことはありません。[10]

３・「―がる」を従える語の性質について

この節では接尾辞「―がる」はどのような語につくか、つまり、「―がる」を従えうる語にどのような性質が含有されているかについて探ってみる。

[10] http://www.harenet.ne.jp/senohpc/symp/fever.html　2006/8/9

『新明解国語辞典第五版』では、形容詞または形容動詞の語幹につく各々の接尾辞が載っているので、ここでは、それを手がかりに「―がる」がつく形容詞と形容動詞を蒐集してみた。それらを五十音順に挙げると、次のようになる[11]。

味気ない　浅ましい　新しい　暑い　暑苦しい　危ない　怪しい
ありがたい　哀れ　粋　息苦しい　勇ましい　忙(いそが)しい　痛い
いとおしい　愛しい　訝しい　忌々しい　忌まわしい　厭
厭らしい　うっとうしい　疎ましい　恨めしい　羨ましい
うるさい　嬉しい　上手い　偉い　おいしい　おかしい
おっかない　惜しい　恐ろしい　覚束ない　重い　重たい
面白い　面映い　かたじけない　悲しい　痒い　汚い　汚らしい
気の毒　決まり悪い　恐縮　気味悪い　くすぐったい　悔しい
苦しい　煙い　煙い　煙たい　煙たい　恋しい　心細い
心許ない　好もしい　寂しい　寂しい　寒い　じれったい
酸っぱい　忙(せわ)しい　忙(せわ)しない　楽しい　珍重　つまらない
冷たい　強い　辛(つら)い　得意　情けない　懐かしい　悩ましい
憎い　妬ましい　眠い　眠たい　歯がゆい　恥ずかしい
人恋しい　ひもじい　不安　不思議　不審　不愉快　欲しい
待ち遠しい　目映い　眩しい　難(むずか)しい　難(むつか)しい　珍しい
めでたい　もったいない　もどかしい　喧しい　ゆかしい
侘しい　悪い

一般に「―がる」との関わり合いをめぐって論じる際に、形容詞（形容動詞を含む）を大きく感情形容詞と属性形容詞に二分して考究をなしている。上掲の形容詞のうち、「羨ましい」、「恥ずかしい」、「痛い」、「不愉快」などのように、専ら文中の主語に当たる者の感情・感覚を表現する感情形容詞もあれば、「重い」、「偉い」、「強い」

[11] 「可愛い」、「怖い」、「寒い」、「善い」は見出し語の項に「―がる」がなく、「可愛がる」、「怖がる」、「善がる」が見出し語、「寒がる」が小見出し語として掲げられている。この類の場合は蒐集の範囲から削除した。

などのように、主語の属性を表すものもある。一方、「酸っぱい」、「つまらない」、「珍しい」などのように、感情・感覚と属性との両方にまたがるものも頗る多いと見受けられる。単に辞書に記述されている語彙的意味から判断しかねる場合がある上に、更に実際の使われ方が絡み合うと、それぞれのカテゴリーへの配置も複雑になってくる。一例を挙げると、前掲の『新明解国語辞典第五版』では、「暑い」は「気温が高くて、我慢出来ない状態だ」とあるが、前半の「気温が高い」は天候の属性になる一方、後半の「我慢出来ない」は感覚に属する。しかし、「台湾はさすがに暑い」の場合はむしろ評価的用法になる。従って、本稿では特に従来のように上掲の形容詞を感情形容詞とか属性形容詞に分けることをせずに、一括して扱うことにする。

これらの「―がる」が接続する形容詞には、次に挙げる（15）～（19）に見るように、一つの共通した特徴が含有されている。すなわち、外的な環境や事態に触発されて、文中の主語に当たる者の内的側面に、当の形容詞が意味する内容を引き起こさせるということである。(15）では「ぼく」と「民子」は愛し合っている者同士であるが、その節は一つ屋根の下で暮らしているにもかかわらず、なにかのめぐり合いで人目を忍んで漸く互いの心持ちを伝え合うことができるという環境に身を置かれているのである。或る日、思いがけないことに、母から二人で一緒に山畑へ行くように命じられたので、心の底で嬉しいという感情が湧き出たのである。つまり、母からの言付けに触発されて、内心では嬉しいという感情が生じるのである。（16）では土をいじったりすると、服や手などが汚れるから、汚いという感覚が伴うのである。言い換えれば、服などが汚れるという事象に誘発されて、意識的に汚いという感覚を表出するのである。その他（17）～（19）のいずれも同様に解釈できる。

（15）ぼくらふたりは、もとより心の底ではうれしいに相違ないけれど、この場合ふたりで山畑へゆくとなっては、人に顔を見られるような気がしておおいにきまりがわるい。義理にも

進んでいきたがるようなそぶりはできない。ぼくは朝飯まえは書室をでない。民子もなにかくずくずして、したくもせぬようす。もう***うれしがって***、といわれるのがくやしいのである。（伊藤『野菊』）

（16）ここまでを体験できた子の子達にとっては、土はすべてを包み、溶かし込んでくれ、また新しい命をはぐくんでくれる母のイメージ！土を***汚がる***なんてとんでもない。[12]

（17）「陽子の気持もわかるよ。だけどねえ、ぼくは甘いのかなあ。でもやっぱり、陽子には生みの母を***恋しがる***やさしさを持っていて欲しいんだよ」（三浦『氷点　続』）

（18）女房の寿々子が今日でとうとう５０歳になった。当人は***いやがっている***が、ボクは***うれしがっている***。（大橋『巨泉』）

（19）「兄さんはついこの間まで小林さんなんかを、まるで鼻の先であしらっていらっしたじゃありませんか。何を言っても取り合わなかったじゃありませんか。それを今日に限って何故そんなに***怖がる***んです。高が小林なんかを***怖がる***ようになったのは、その相手が嫂さんだからじゃありませんか」「そんならそれでいいさ。僕がいくら小林を***怖がったって***、お父さんやお母さんに対する不義理になる訳でもなかろう」（夏目『明暗　上』）

これに対し、次の（20）～（23）に示すように、説話者が、外在している物事や事象とかけ離れて、当の外的な物事や事象をめぐって品定めを行ったり、文中の主語に当たる者がある対象に対して持っている感情や感覚のあり方を判断したり、評価したりする場合、形容詞に「―がる」を接続させない。（20）における「爽やかだ」は悠一と恭子が唇を触れ合っている模様に対しての「杉」の感想であり、別の観点から言えば、二人が口付けをしている事象自体は汚れのない、清純なという感じを与えるということになる。それはあく

[12] http://www13.ocn.ne.jp/~k.nakao/sindenhoikure.htm　2006/8/8

まで外的事象の性状についていうものであり、終助詞「な」の付加によって、説話者「杉」の事象への品定めとも言えるのであるが、二人のキスシーンに触発されて、「杉」の内的側面に「爽やかだ」という感覚が引き起こされたとは思えない。(22) における「苦手だ」は説話者が、相手の「ポチ」が子供に接する態度のあり方について評するものであり、そこにも前述したような外的事象の触発による内的感情の出現が含まれていない。(21) と (23) からも同様な特徴を抽出することができる。

(20) 遠くで、悠一と恭子が唇を触れ合っているのが見える。「―うーん」と、杉が唸って、「***爽やかだ***な。十代のキスか。三十代になると、どうも……」つい、我が身に置きかえてしまう杉なのだった……。(赤川『天使に涙』)

(21) そんなわけでキズキは僕をダブル・デートに誘うことをあきらめ、我々三人だけでどこかに出かけたり話をしたりするようになった。キズキと直子と僕の三人だった。考えてみれば変な話だったが、結果的にはそれがいちばん***気楽だった***し、うまくいった。(村上『ノルウェイ』)

(22) 大型の観光バスが来て、正門前に停まった。バスガイドが降りて来て、チケット売場の方へ駆けて行く。「見ろよ。ガキどもだぜ」と、ポチが舌打ちする。「あんた、子供が***苦手だ***もんね」「うるせえからいやなだけさ」(赤川『天使に涙』)

(23) おれはこの食うや食わずのままで、一生をすごさなければならないのだろうか。ぱっとしたことを一度もすることなく。これでは、なんとなく***不公平だ***な。同じ人間でも、社長はあんなに金まわりがいいのに。(星『おせっかいな』)

以上検討したように、形容詞が接尾辞「―がる」と結合して所謂「―がる」動詞を派生させるかいなかは、外的事象の触発により、形容詞文の主語に当たる者の内的側面に、形容詞の意味する内容を引き起こさせるかどうかという性質に関わっていることが分かった。「―がる」を従える形容詞は一般に言う感情形容詞に属するが、従

えないのは属性形容詞に属すると大まかに分けることができる。とはいえ、「心憎い」、「後ろ暗い」、「うら悲しい」、「気だるい」などのように、「―がる」が接続しない感情形容詞もある一方、「強い」、「偉い」、「新しい」、「粋」などのように、「―がる」がつく属性形容詞もある。従って、すべての感情形容詞に「―がる」がつくわけでもなければ、属性形容詞なら、それに「―がる」はつかないわけでもない。要は上記の性質を当の形容詞は内包しているかどうかという点に関わっているのである。これと関連して、例えば「通」、「通人」、「芸術家」、「豪傑」などのように、一部の名詞ないし謝罪を表す「すまない」にも「―がる」を付加することができるのは、これらの語には前述した形容詞の場合と同様な性質を含有しているからであると考えられる。

しかし、一口に文中の主語に当たる者の内的側面に形容詞の意味する内容を引き起こさせる性質と言っても、それをめぐって認定するのに微妙なところがあるのも否めない。「熱い」、「疎い」「後ろめたい」、「賢い」、「辛(から)い」「気恥ずかしい」、「臭い」、「暗い」、「小面憎い」、「渋い」、「しょっぱい」、「狭い」、「高い」、「苦い」、「誇らしい」、「面倒くさい」、「やるせない」、「痛快」、「高尚」などの項において「―がる」との接続は前掲の『新明解国語辞典第五版』には載っていないが、(24)～(27)に示すように、実際には使われていると見受けられる。この辞書での掲載と実際の使用との間の落差は前述の形容詞の内包する性質についての認定上の微妙さを物語っていると思われる。

(24) そういうしだいだから、作おんなのお増すなどは、むしょうと民子を***こづら憎がって***、なにかというと、「民子さんは政夫さんとこへばかりいきたがる、ひまさえあれば政夫さんにこびりついている」などとしきりにいいはやしたらしく【略】(伊藤『野菊』)

(25) 結局、予定時間を超えてしまったため、僕は歌う必要がなくなってしまったという苦い思い出がある。いや、別に***苦が***

る必要はないかもしれないが【略】。[13]

(26)「いやしくも志を立てて学問の道に進み入る以上は、終局は人生の御用学者と、なり切るのが寧ろ本望であって、それをただ一身の心ゆかしに、前後を忘れて没入する人に比べて、少しでも肩身を***狭がる***理由はない。」と、「歴史教育について」と題した文中にも言う。[14]

(27) あじきな-が・る〖他四〗***やるせながる***。堪えがたく思う。恋う。切愛する。[15]

４・「―がる」の機能について

外的事象の触発により、文中の主語に当たる者の内的側面に形容詞（名詞等の場合を含む）の意味する内容を引き起こさせる性質を含有していれば、当該形容詞の語基に「―がる」を結合させることができると前節で検討した。とすれば、形容詞と、語基に「―がる」の付加によって作られた「―がる」動詞との間にどのような意味的違いがあるのか、すなわち、「―がる」の機能はどうかという問題が出てくる。これを究明するためには両者間の対照・比較が有効と思われる。

そもそも「感覚・感情を表す形容詞」はある事象や物事に対する感情主の内的情緒の反応である。その反応は、(28) における「恥ずかしい」、「恥かしくない」のように、心的側面、言うなれば深層に止まっている場合もある一方、(30) における「辛い」のように、具体的な感覚とともに、「舌が完全麻痺状態」や「汗が出る出る」など外的側面、言うなれば表層的な表れが伴う場合もある。しかし、表面に具現されるものが見受けられるとしても、それは感覚・感情を表す形容詞そのものの意味内容に包括されるものではなく、あくまで感覚・感情の生起に伴う付随的なものであると考えられる。言い換えれば、舌がしびれていて、汗がたらたら出ているという外的様

[13] http://homepage2.nifty.com/ujikun/tusin/2002/020801.htm
[14] http://www.kurikomanosato.jp/00x-10-51wt-yanagida-01.htm
[15] 『広辞苑第五版』(岩波書店　1998) p.44

態と、御飯ものの味について本人がいかに受け止めるかは別問題である。味に関しての受け止め方、つまりその感覚をいかに反応するかは本人の心的側面に属するものであるのに対し、汗が出る、舌がしびれるというのは「辛い」による生理的反応である。本人が自らの内的感覚を語らない限り、外的反応のみでは必ずしもそうと言い切れるとは限らない。

これに対して、(29) に示すように、男性でありながら、女性的な動きをしたり、ポーズを取ったりするのにはじくじたるものがあるからこそ、それを何とか男性的にしようとしているというところから、「恥ずかしい」という感情はもはや内的側面から外的側面に転化され、表情や体の動きなどによって捉えられていることが分かる。従って、本人からの報知がなくても、傍の者は、その表情や手足の動きなどから、本人が「恥ずかしい」状態にあるのを確と感知できるゆえ、「恥ずかしがって」という表現が用いられうるのである。(31) における「辛がる」も同様に解釈できる。つまり、(30) では、「舌が完全麻痺状態」、「汗が出る出る」、「「辛いわ…ホンマ辛いわ」と呪文を唱えてました」という背景的描写がなされている。これに引き続き、その結果として、(31) では「「どうかお許しを」とばかりに、残しちゃいました」と出ている。この二つの節を読み合わせると、「辛い」は既に単なる感覚という程度を通り越して具体的な状態や行動として呈出されているから、かりそめ言葉の助けを借りなくても、傍から本人は「辛い」状態にあるのが分かる。従って、「辛い」の代わりに「辛がる」と表現されるのである。

(28)「だって、みんな白い服なんだろう？陽子ちゃん一人だけ、ちがう服なんて恥ずかしいだろう？」徹は弱りきっていた。「***恥ずかしくない***の。陽子」「まあ、恥ずかしくないの？陽子ちゃんが恥ずかしくなくても、おかあさんが***恥ずかしい***わ」(三浦『氷点』)

(29) 今日のレッスンは、少々女性的な動き、ポーズも入っており、男性には少々照れ臭い部分も有りました。そういう事も

あって、周囲の男性を見渡してみると、インストラクターさんの見本通りにする人、やはり***恥ずかしがって***女性的な動きを何とか男性的にしてみようとしている人、色々です。[16]

(30)「いただきます」をしてから、一口目は味がしておいしいんだけど、三口目ぐらいからは舌が完全麻痺状態。汗が出る出る。食べてる間ずっと「***辛い***わ…ホンマ***辛い***わ」と呪文を唱えてました。[17]

(31) ご飯ものはすべて辛いし【略】「どうかお許しを」とばかりに、残しちゃいました。【略】私たちがあまりにも***辛がる***もんだから、現地の先生が気を遣ってくれて、次回から、辛くない料理を作ってくれるとっても親切なレストランへ。[18]

このように見てくると、「感覚・感情を表す形容詞」と所謂「―がる」動詞との間の意味的な違いについて次のようなことを指摘することができる。感覚・感情を表す形容詞の意味する内容は心的側面、つまり深層に属するものであるのに対し、「―がる」動詞は深層にある感覚・感情の表層化、つまり外的側面に具現されたのを表す。もっとはっきり言えば、前者は内であり、後者は外であって、両者はそれぞれ異なる側面を司るものである。ここでは、「―がる」は決して内から外へ変化する一連の流れを把握するのではなく、変化の過程と関わりなく、外に具現されたのを表すのである点を注意されたい。一方、形容詞による表現の場合と、「―がる」動詞による表現の場合とともに非言語行動が随伴されることがしばしばある。しかし、前者においては、形容詞の意味する内容の生起に伴う、いわば付随的なものであり、形容詞の意味内容の表出を助ける働きを必ずしも持っていないのに対し、後者においては、それは文中の主語が形容

[16] http://tomobataraki.seesaa.net/article/6562209.htm　2005 年 9 月 4 日
[17] http://rakudiary.exblog.jp/i2　2006/8/8
[18] 17 に同じ。

詞の意味する内容の状態にあるのを認知する補助的働きを持っている。この意味で両者は性格を異にしていると思われる。

先にも指摘したように、外的事象の触発により、文中の主語に当たる者の内的側面に、形容詞の意味する内容を引き起こさせる性質を含有していれば、当該形容詞の語基に「―がる」を結合させることができる。とはいうものの、すべてそのような性質を有している形容詞が「―がる」を従えうるわけではない。「寒い→寒がる」はあるが、「肌寒い→肌寒がる」は成り立たない。「悲しい→悲しがる」は見られるが、「うら悲しい→うら悲しがる」は見当たらない。つまり、同じく上述したような性質を内包しているにもかかわらず、「―がる」を従えることができるものとできないものとの境目は何かについて、なお弁明する必要がある。「辛い」を例として挙げると、「辛さ」の受け止め方には様々な段階がある。何気なく「辛いね」と言う場合もあれば、前掲（30）・（31）のように限界を超えて食べ切れずに残してしまったという場合もある。前者は普通に言う「辛い」の度合であり、これをニュートラルとする。後者は明確にニュートラルを越えており、そしてその度合が増幅するにつれて、拒否反応さえ出てくることもある。こちらをプラスとする。感情・感覚がニュートラル前後またはそれ以下の場合は、その度合が低い、言い換えれば、感受性が弱いゆえ、殊に何らかの形でそれを表面化する必要もなく、内的側面に受け止めるのが普通である。逆に感情・感覚がニュートラルの線を越えてプラスの域に入っていれば、感受性の強さが増すのに伴って、何らかの形でそれを外的側面に表出せずにはいられないと考えられる。従って、「うそ寒い」、「肌寒い」、「薄気味悪い」、「うら悲しい」などは「―がる」動詞にならないのがここに一因を求めることができるのである。

５・同一語基を有する「―がる」動詞と「―む」類動詞との意味的相違について

前掲の辞書に掲げた「―がる」動詞の作れる形容詞と、現時点で

筆者が蒐集した「―がる」動詞の作れる形容詞とを基にして、対応する動詞、すなわち形容詞と同一の語基から派生した動詞を調べてみると、次のような 30 組が挙げられる。

怪しい―怪しむ	哀れ―哀れむ
勇ましい―勇む	痛い―痛む・痛める
訝しい―訝る	忌々しい・忌まわしい―忌む
疎い・疎ましい―疎む	恨めしい―恨む
羨ましい―羨む	偉い―偉ぶる
惜しい―惜しむ	恐ろしい―恐る・恐れる
悲しい―悲しむ	悔しい―悔む
苦しい―苦しむ・苦しめる	煙い―煙る
恋しい―恋う	好もしい―好む
狭い―狭まる・狭める	高い―高まる・高める
楽しい―楽しむ・楽しめる	頼もしい―頼む
つまらない―つまる	強い―強まる・強める
懐かしい―懐かしむ	悩ましい―悩む
憎い・憎らしい―憎む	妬ましい―妬む
眠い・眠たい―眠る	恥ずかしい―辱める

そのうち、語尾から見ると、「恋う」を除けば、おおよそ「怪しむ・恨む・羨む」などのような「―む」類動詞と、「痛める・高まる・苦しめる」などのような「―る・―める」類動詞とにまとめることができる。(32) ～ (34) に見るように、「高がる」には「高い」の語義が保たれており、両者は意味的に同一のカテゴリーに属するのに対し、「高まる」は物事の程度が高くなる、「高める」は物事の程度を高くするといった意味に転じ、生理的変化とか人為的変化が含有され、「高い」・「高がる」とは意味的に別のカテゴリーに入る。このような傾向はその他の「恥ずかしい」と「辱める」、「狭い」と「狭まる・狭める」などにも見られる。一方、(35) ～ (37) に示すように、(35) の「苦しがる」を「苦しむ」に、(36) の「苦しま

れた」を「苦しがられた」に取り替えても、多少なりとも不自然と感じられるものの、非文とまで言い切れまい。しかし、(37) の「苦しむ」は「苦しがる」では代用できない。つまり、「苦しがる」と「苦しむ」は類義的関係を持っているように見受けられる。この点は「怪しがる」と「怪しむ」、「懐かしがる」と「懐かしむ」などにも同断である。以下、この「―がる」動詞と「―む」類動詞との意味的相違について探ってみる。

(32) このくらいの値段を***高がって***いてはここで買い物はできないよ。[19]

(33) ドアにノックの音がした。なつかしい、愛情のこもった響きだった。隆二の動悸は***高まり***、すぐには声が出なかった。(星『ノック』)

(34) そんな男の感情を、老婆のほうも気がついたらしい。少し声を***高めて***言った。「本当だよ。なんなら、ためしてみなさるかね」(星『ノック』)

(35) うずくまって***苦しがる***北原の足に、血が出ていないのを見て安心したのも束の間、見る見るうちに、足は張りさけんばかりにふくれあがってくる。(三浦『氷点　続』)

(36) いま、わたしは、あなたがおにいさんの愛を受け入れられずに***苦しまれた***のではないかと、想像しています。(三浦『氷点　続』)

(37) (どの位***苦しんで***死ぬのかしら) もし、***苦しんで***罪が消えるものならば、どんなに***苦しんでも***いいと、陽子は雪の上に横たわった。(三浦『氷点』)

先述したように、「―がる」動詞は深層にある感情・感覚が表層化、つまり外的側面に顕示されたのを表す。「感情・感覚を表す形容詞」との違いはかたや外面に具現されているものであって、かたや内面に止まっているものであるというところにある。(38) では、「まさ

[19] 大江 (1975) から引用。

か殺されるとも思うまいわ」という節から、当の男は危なそうなことなどをせずに、日一日無事に生きていられるように気を遣っている小心者であることが分かる。従って、「命を惜しがる男」と表現されるのである。(40) では、岡本にとって「君のお父さん」が理想像であり、本人も切にそうなりたいという心持を談話から十分感じ取ることができたから、「岡本も羨ましがってた」と用いられたのである。さて、(39) では、「せめてその人の乗っている列車が見えなくなるまで送る」という動作の実行をもって「別れを惜しむ」の実質を形づけるという読みができる。換言すれば、「惜しむ」は単なる感情の次元に止まるものではなく、行動を通して具現されるものであるということになる。他方、(41) では、「てんでに」という言葉から、同窓たちが各々自己流に信子と彼女の従兄とが一緒にいる時の姿の真似をすることが分かる。つまり、ここでも、実際の行動によって「羨む」の意味内容が実現されると読み取れる。このような特徴は「哀れむ」、「苦しむ」、「憎む」、「懐かしむ」やその他の「―む」類動詞にも明確に見受けられるのである。

(38) 三好が考えていると、吉川はすぐ隣から口を出した。「まさか殺されるとも思うまいわ。ことにこの人は」「何故です。人間がずうずうしいからですか」「という訳でもないですが、とにかく非常に命を***惜しがる***男だから」(漱石『明暗　上』)

(39)「でも、わたしはせめて、その人の乗っている列車が見えなくなるまで、送っていたいわ」「それが本当の別れを***惜しむ***気持でしょうね」(三浦『氷点　続』)

(40)「大方詩でも作って遊んでるだろう。気楽で好いね。昨夜も岡本と或所で落ち合って、君のお父さんの噂をしたがね。岡本も***羨ましがってた***よ。あの男も近頃閑暇になったようなものの矢っ張、君のお父さんの様に行かないからね」(漱石『明暗　上』)

(41) 信子と従兄との間がらは、勿論だれの眼に見ても、来たるべき彼らの結婚を予想させるのに十分であった。同窓たち

は彼女の未来をてんでに***羨んだり***妬んだりした。（芥川「秋」）

以上述べたところを整理してみると、「感情・感覚を表す形容詞」と「―がる」動詞と「―む」類動詞の三者はそれぞれ深層にある感情、表層化された感情、それから動作としての表出というように、表現の次元が異なり、且つきれいな位置づけを呈示していると見受けられる。そして、「眠る」、「煙る」、「高まる」、「狭まる」など主語の様態の変化を表す「―る・―まる」類動詞の場合を経て、「痛める」、「高める」、「辱める」など人為的刺激などの付加によって対象の状態に変化をもたらす「―める」類動詞に至って、その行動の具体性も次第に強まってくると考えられる。

王（2005:247）では、「―がる」動詞は「感情主のほうに密接に関わっており感情主の行動を中心に描写する機能を持つ」のに対し、「―む」類動詞は「感情対象に（筆者注：ヲ格名詞句）密接に関係し、感情対象の性質や状態及びそれによって引き起こされた感情行為を描写する機能を果す」と指摘している。しかし、上の分析からは頷けない。理由は次に挙げる三点である。（イ）「―がる」動詞は感情主の行動を表すものではない。（ロ）「―む」類動詞は感情対象の性質や状態を描写する機能を持たない。（ハ）「―がる」動詞文において感情主が明示的であり、感情対象が暗示的であるから、「―がる」動詞は感情主の方に密接に関わっている。これに対して、「―む」類動詞文において感情主が暗示的であり、感情対象が明示的であるから、「―む」類動詞は感情対象の方に密接に関係していると云々するのはいかにも表面的に過ぎると言わざるをえない。前掲（５）における「カッコ良がって」や（16）における「汚がる」または次の（42）における「ありがたがる」は感情主不在の例であり、その反証になる。

（42）「いただいたものなら、何でも***ありがたがる***なんて、乞食みたいですわ」（三浦『氷点　続』）

６・おわりに

以上、接尾辞「―がる」について考察してみた。主な結果をまとめると、次のようなことを挙げることができる。(イ)「―がる」のつく形容詞には、外的事象の触発により、感情主の内的側面に当該形容詞の意味内容を引き起こさせる性質を内包していなければならない。(ロ)「―がる」は形容詞の有する内的、つまり深層的な感情・感覚が外的、即ち表層的側面に呈出されるのに用いられる。これが「―がる」の機能である。従って、「―がる」動詞も形態的には動詞的カテゴリーに入るが、意味的には形容詞的カテゴリーに属する。そこにはしばしば非言語行動が付随されているが、それは感情・感覚の表層化を認知するのに補助的な働きをするのに止まる。(ハ)「―がる」を用いるためには、形容詞の意味する内容は、その度合が増幅され、ニュートラルの線を越えてプラスの域に入っているのが一般的である。(ニ) 感情・感覚が深層から表層を経て、行動による実現、そして主語の状態の変化、人為的刺激による感情対象の様態の変化に至っての一連の動きの各々の段階を表すのに、形容詞、「―がる」動詞、「―む」類動詞、「―る・―まる」類動詞、「―める」類動詞が確固として位置づけられる。(ホ) 各々の位置づけから「―がる」動詞と「―む」類動詞との違いもはっきりと把握することができる。前者は形容詞の本来の語義を内包しており、依然として形容詞的働きを持つのに対し、後者は行動を通じて具現されるので、動詞的働きを果すのである。

「―がる」は主語が一人称、二人称、三人称に関わらず用いられうるが、ことに一人称の場合は二人称または三人称ほど自由に使われていないようである。これは日本人の発想と関係があると思われるが、この点について解明する必要がある。なお、「偉がる」と「偉ぶる」のように「―がる」と「―ぶる」はどう違うかについて、黄（2004:113-115）で触れており、参考になるが、更に資料を集め、究明するところがある。なお、一口に「―がる」動詞と言っても、

形容詞や形容動詞、名詞などそれぞれの品詞の違いにより「―がる」の意味解釈がどう異なるのかについても究明を要とするものと思われる。併せて今後の課題としたい。

参考文献

用例出典

赤川次郎（2000）『天使に涙とほほえみを』角川書店
芥川龍之介（1966）「秋」『現代日本文学館 20 芥川龍之介』文芸春秋
伊藤左千夫（1983）『野菊の墓』偕成社
三浦綾子（1989）『氷点』朝日新聞社
三浦綾子（1990）『氷点　続』朝日新聞社
大橋巨泉（2000）『巨泉日記』講談社
夏目漱石『明暗　上』新潮社
星新一（1980）『おのぞみの結末』新潮社
星新一（1980）『おせっかいな神々』新潮社
星新一（1981）『ノックの音が』講談社
村上春樹（1991）『ノルウェイの森』講談社

辞書類

『広辞苑第五版』（1998）岩波書店
『新明解国語辞典第五版』（1997）三省堂

なお、その他インターネットや新聞紙からの引用は随所に記されているので、ここでは省略とする。

王安（2005）「接尾辞「～がる」の機能の再考」『北海道大学大学院文学研究科研究論集５』北海道大学大学院文学研究科
大江三郎（1975）『日英語の比較研究―主観性をめぐって』南雲堂
大曽美恵子（2001）「感情を表す動詞・形容詞に関する考察」『言語文化論集　22[2]』名古屋大学
黄其正（1999）「接尾辞「～がる」考」『日本語表現法論攷』渓水社

黄其正（2004）『現代日本語の接尾辞研究:101-117』渓水社
小山敦子（1966）「「の」「が」「は」の使い分けについて」『國語学66』國語学会
清水由美（1992）「「がる」再考」『言語文化と日本語教育４』お茶の水女子大学日本言語文化学研究会
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ:139-155』くろしお出版
西尾寅弥（1972）『形容詞の意味・用法の記述的研究』国立国語研究所　秀英出版
仁田義雄（1979）「感情表現の一考察」『国文神戸３』神戸大学文学部
森田富美子（1988）「接尾辞「～がる」について」『東海大学紀要８』東海大学留学生教育センター
森田良行（1992）『基礎日本語辞典:354-355』角川書店
矢沢真人（1998）「日本語の感情・感覚形容詞」『言語 27』大修館